

演習問題 1.9 次の部分空間で等しいものはどれか? ただし $\mathbf{x}_0 = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$, $\mathbf{x}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$,

$$\mathbf{x}_2 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ -1 \end{pmatrix}, \mathbf{x}_3 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, \mathbf{x}_4 = \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \\ 0 \end{pmatrix}, \mathbf{x}_5 = \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \\ 1 \end{pmatrix}, \mathbf{x}_6 = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ -1 \end{pmatrix}, \mathbf{x}_7 = \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \\ -2 \end{pmatrix}$$

$$\mathbf{x}_8 = \begin{pmatrix} -2 \\ 2 \\ 4 \end{pmatrix} \text{ とする。}$$

- | | |
|--|--|
| (1) $W_1 = \{\mathbf{0}\}$ | (2) $W_2 = \langle \mathbf{x}_0 \rangle$ |
| (3) $W_3 = \langle \mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2 \rangle$ | (4) $W_4 = \langle \mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2, \mathbf{x}_3 \rangle$ |
| (5) $W_5 = \langle \mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2, \mathbf{x}_5 \rangle$ | (6) $W_6 = \langle \mathbf{x}_4, \mathbf{x}_5 \rangle$ |
| (7) $W_7 = \langle \mathbf{x}_4, \mathbf{x}_5, \mathbf{x}_6 \rangle$ | (8) $W_8 = \langle \mathbf{x}_7 \rangle$ |
| (9) $W_9 = \langle \mathbf{x}_8 \rangle$ | (10) $W_{10} = \langle \mathbf{x}_7, \mathbf{x}_8 \rangle$ |
| (11) $W_{11} = \langle \mathbf{x}_4, \mathbf{x}_5, \mathbf{x}_7, \mathbf{x}_8 \rangle$ | (12) $W_{12} = \mathbf{R}^3$ |

$$(13) W_{13} = \left\{ \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} \in \mathbf{R}^3 \mid x_1 - x_2 + x_3 = 0 \right\}$$

$$(14) W_{14} = \left\{ \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} \in \mathbf{R}^3 \mid x_1 + x_2 = 0 \right\}$$

$$(15) W_{15} = \left\{ \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} \in \mathbf{R}^3 \mid x_1 - x_2 + x_3 = 0, x_1 + x_2 = 0 \right\}$$

$$(16) W_{16} = \left\{ \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} \in \mathbf{R}^3 \mid x_1 - x_2 + x_3 = 0, x_1 + x_2 = 0, x_2 + x_3 = 0 \right\}$$

1.4 1次独立と基底

この節ではベクトルは $V = \mathbf{R}^2$ または $V = \mathbf{R}^3$ に属するものと考えている。演習問題 1.9 から分かる様に、ベクトルの選び方により $\langle \mathbf{x}_1 \rangle = \langle \mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2 \rangle$, $\langle \mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2 \rangle = \langle \mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2, \mathbf{x}_3 \rangle$ となる事もあるし、 $\langle \mathbf{x}_1 \rangle \subsetneq \langle \mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2 \rangle$, $\langle \mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2 \rangle \subsetneq \langle \mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2, \mathbf{x}_3 \rangle$ となる事もある。この様子を考えるため次を定義する。

定義 1.16 何個かのベクトルの組 $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n$ が次の性質をもつとき 1次独立 (*linearly independent*) であるという: 任意のスカラー c_1, \dots, c_n に対し

$$c_1 \mathbf{v}_1 + \dots + c_n \mathbf{v}_n = \mathbf{0}$$

このプリントも含め講義関連のプリントは <http://math.cs.kitami-it.ac.jp/~kouno/kougi.html> においてある。

が成立するならば $c_1 = \cdots = c_n = 0$ が従う。

係数がすべて 0 のときはいつでも 1 次結合のベクトルが 0 になる。この定義はその逆が成立する事を主張するものである。

$n = 1, 2, 3, 4$ の場合 1 次独立が何を意味しているか具体的にみよう。

最初は $n = 1$ の場合: v_1 に対し $c_1 v_1 = 0$ から $c_1 = 0$ が出てくるための必要十分条件は $v_1 \neq 0$ である。即ち 1 個のベクトル v_1 が 1 次独立である必要十分条件は $v_1 \neq 0$ である。生成の記号を用いて書くと v_1 が 1 次独立である必要十分条件は $\langle v_1 \rangle \neq \{0\}$ である。

次に $n = 2$ の場合: $c_1 v_1 + c_2 v_2 = 0$ から $c_1 = c_2 = 0$ が出てくるためには, v_1 と v_2 が 0 と異なり, 2 つのベクトルが並行でない事が必要十分である。この事は否定命題の方が分かりやすいかもしれない。今 $c_1 v_1 + c_2 v_2 = 0$ で $c_1 \neq 0$ または $c_2 \neq 0$ が成立しているとする。 $c_1 \neq 0$ のときは $v_1 = -\frac{c_2}{c_1} v_2$ と書ける。 $c_2 \neq 0$ のときは $v_2 = -\frac{c_1}{c_2} v_1$ と書ける。いずれの場合も一方のベクトルは他方のベクトルの実数倍になっている。生成の記号を用いて書くと v_1, v_2 が 1 次独立である必要十分条件は $\{0\} \subsetneq \langle v_1 \rangle \subsetneq \langle v_1, v_2 \rangle$ が成立する事である。

$n = 3$ の場合: $V = R^2$ の場合 3 個のベクトルが 1 次独立になる事はない (これに関しては後で示す)。

$V = R^3$ の場合, v_1, v_2, v_3 が 1 次独立である必要十分条件は 3 つのベクトルが平行 6 面体の 3 辺になっている事である。1 次独立を否定すると, $c_1 v_1 + c_2 v_2 + c_3 v_3 = 0$ かつ $c_1 = 0$ または $c_2 = 0, c_3 = 0$ が成立する。 $c_3 \neq 0$ とすると, $v_3 = -\frac{c_1}{c_3} v_1 - \frac{c_2}{c_3} v_2$ と表す事ができる。このとき v_3 は v_1 と v_2 が張る平面上に存在する。 $c_1 \neq 0, c_2 \neq 0$ の場合も同様にできる。生成の記号を用いて書くと v_1, v_2, v_3 が 1 次独立である必要十分条件は $\{0\} \subsetneq \langle v_1 \rangle \subsetneq \langle v_1, v_2 \rangle \subsetneq \langle v_1, v_2, v_3 \rangle$ が成立する事である。

$n = 4$ の場合: これも後で示すが, 2 次元・3 次元ベクトルに対しては, $n \geq 4$ の場合はいつでも 1 次独立ではない。それならば一般的な定義をしなくてもいいのではないかと思う人もいるかもしれない。我々が今取り扱っている 2 次元・3 次元のベクトルの場合は上記の様になるが, 一般のベクトルに対してもこの定義は一般化され, その場合は上記の事は成立しない。

今の議論を一般的に述べると次の命題が得られる。

命題 1.17 ベクトル v_1, \dots, v_n, v_{n+1} について次の 2 つは同値。

- (1) ベクトル v_1, \dots, v_n, v_{n+1} は 1 次独立である。
- (2) ベクトル v_1, \dots, v_n は 1 次独立であり, $v_{n+1} \notin \langle v_1, \dots, v_n \rangle$ が成立する。

証明 (1) \Rightarrow (2) 定義より v_1, \dots, v_n が 1 次独立なのは明らか。もし $v_{n+1} \in \langle v_1, \dots, v_n \rangle$ とすると, 実数 a_1, \dots, a_n が存在して $v_{n+1} = a_1 v_1 + \cdots + a_n v_n$ となるが, これは

$$a_1 v_1 + \cdots + a_n v_n + (-1)v_{n+1} = 0$$

となり, 1 次独立性に矛盾。

(2) \Rightarrow (1) 1 次独立でないとするときどれかは 0 でない実数 a_1, \dots, a_n, a が存在して

$$a_1 v_1 + \cdots + a_n v_n + a v = 0$$

が成立する。ここで $a = 0$ とすると v_1, \dots, v_n の 1 次独立性に反するので $a \neq 0$ 。よって移行して

$$v_{n+1} = \left(-\frac{a_1}{a}\right)v_1 + \dots + \left(-\frac{a_n}{a}\right)v_n$$

が得られ、 $v \in \langle v_1, \dots, v_n \rangle$ となり矛盾。■

命題 1.17 の前に説明したことを命題として書いておく。

命題 1.18

- (1) v_1 が 1 次独立である必要十分条件は $\{0\} \subsetneq \langle v_1 \rangle$ である。
- (2) v_1, v_2 が 1 次独立である必要十分条件は $\{0\} \subsetneq \langle v_1 \rangle \subsetneq \langle v_1, v_2 \rangle$ である。
- (3) v_1, v_2, v_3 が 1 次独立である必要十分条件は $\{0\} \subsetneq \langle v_1 \rangle \subsetneq \langle v_1, v_2 \rangle \subsetneq \langle v_1, v_2, v_3 \rangle$ である。

演習問題 1.10 次のベクトルの組が 1 次独立かどうか調べよ。

$$(1) v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, v_2 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$$

$$(2) v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, v_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, v_3 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ a \end{pmatrix} \quad (a \text{ は定数})$$

$$(3) v_1 = \begin{pmatrix} a \\ a \\ a \end{pmatrix} \quad (a \text{ は定数})$$

$$(4) v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, v_2 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, v_3 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$$

$$(5) v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, v_2 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, v_3 = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, v_4 = \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{pmatrix}$$

$$(6) v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{pmatrix}, v_2 = \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ q \end{pmatrix}, v_3 = \begin{pmatrix} 1 \\ p \\ 3 \end{pmatrix} \quad \text{ここで } p, q \text{ はある定数。}$$

e_1, e_2, e_3 を基本ベクトルとする。即ち

$$e_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}, e_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, e_3 = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$$

とする。任意の R^3 のベクトル v に対し、実数 x_1, x_2, x_3 が唯一組存在して $v = x_1 e_1 + x_2 e_2 + x_3 e_3$ と表す事ができる。この様な性質を持つベクトルの組は基本ベクトルに限らない (演習問題 1.11 参照)。ここでは部分空間に関してその様なベクトルの組を考える。

定義 1.19 部分空間 W に対し次の様な性質をもつ W のベクトルの組 v_1, \dots, v_n が存在する時これを W の基底 (base) と呼ぶ。つまり,

- (1) v_1, \dots, v_n は 1 次独立である。
- (2) 任意のベクトル $v \in W$ に対し実数 a_1, \dots, a_n が存在して

$$v = a_1 v_1 + \dots + a_n v_n$$

と書き表せる。

命題 1.20 定義 1.19 の 2 つ目の条件は次と同値である：
 v_1, \dots, v_n は W を生成する，即ち $W = \langle v_1, \dots, v_n \rangle$ が成立する。

演習問題 1.11 次のベクトルの組が W の基底である事を示せ。

(1) $\begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, W = \mathbf{R}^3$

(2) $\begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 2 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 \\ 8 \\ 4 \end{pmatrix}, W = \mathbf{R}^3$

(3) $\begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ -1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ -1 \end{pmatrix}, W = \left\{ \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \in \mathbf{R}^3 \mid x + y + z = 0 \right\}$

(4) $\begin{pmatrix} 2 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 2 \end{pmatrix}, W = \left\{ \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \in \mathbf{R}^3 \mid x - 2y + z = 0 \right\}$

(5) $\begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ -1 \end{pmatrix}, W = \left\{ \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \in \mathbf{R}^3 \mid x + y + z = 0, x - 2y + z = 0 \right\}$

命題 1.17, 命題 1.20 により v_1, \dots, v_n が W の基底であるとは極大な—つまり他の W のベクトルを加えると 1 次独立でなくなる様な— 1 次独立なベクトルの集合である事が分る。つまり, v_1, \dots, v_n が W の基底である必要十分条件は次の 2 つが成立する事である。

- (1) v_1, \dots, v_n が 1 次独立である事。つまりスカラー a_1, \dots, a_n に対し

$$a_1 v_1 + \dots + a_n v_n = \mathbf{o} \implies a_1 = \dots = a_n = 0$$

が成立する。

- (2) 極大である。つまり, 任意の W のベクトル v に対し

$$v, v_1, \dots, v_n$$

は 1 次独立でない。

これは基底を見つける方法を与える。 W を部分空間とする。

$W = \{0\}$ の場合は特別である。基底が存在しないとも考えられるが、例外があるのはいやなので空集合が基底と考える事にしよう。

$W \neq \{0\}$ の場合は o でないベクトル v_1 を持つてくる。次にベクトル v で v, v_1 が 1 次独立なものを捜す。 $\langle v_1 \rangle = W$ ならこの様なベクトルが存在せず、 v_1 が基底になる。 $\langle v_1 \rangle \subsetneq W$ のとき、1 次独立なものが存在するので、それを v_2 とする。次にベクトル v で v, v_1, v_2 が 1 次独立なものを捜す。 $\langle v_1, v_2 \rangle = W$ のとき、この様なベクトルが存在せず、 v_1, v_2 が基底になる。 $\langle v_1, v_2 \rangle \subsetneq W$ のとき 1 次独立なものがするので、それを v_3 とする。次にベクトル v で v, v_1, v_2, v_3 が 1 次独立なものを捜す。あとで一般的な枠組みで示すが、ここでは R^3 の 4 個以上のベクトルの組は 1 次独立でない事を証明抜きで認めておこう。

以上から R^3 の部分空間 W は

- (1) $W = \{0\}$
- (2) $W = \langle v_1 \rangle$
- (3) $W = \langle v_1, v_2 \rangle$
- (4) $W = R^3$

の 4 つのタイプがある事が分かる。

そこで部分空間の‘次元’を基底の個数で定義する。つまり (1) の場合 W は 0 次元、(2) の場合 W は 1 次元、(3) の場合 W は 2 次元、(4) の場合 W は 3 次元、と定義する。 W 次元を $\dim W$ と表す。⁽¹⁾

演習問題 1.12 次の部分空間の基底を 1 組求め、次元を求めよ。

$$(1) W = \left\{ \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} \in R^3 \mid x_1 + 5x_2 + x_3 = 0 \right\}$$

$$(2) W = \left\{ \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} \in R^3 \mid x_1 + 2x_2 + 3x_3 = 0 \right\}$$

$$(3) W = \left\{ \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} \in R^3 \mid x_1 + 4x_2 - x_3 = 0, 2x_1 + 3x_2 + x_3 = 0 \right\}$$

$$(4) W = \left\{ \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} \in R^3 \mid x_1 + 4x_2 - x_3 = 0, 2x_1 + 8x_2 - 2x_3 = 0 \right\}$$

⁽¹⁾ 厳密に言うとき基底の個数が基底の選び方によらず一定である事を言わなければ厳密な定義にはならない。つまり次元を定義するためには次の事実が必要になる。

v_1, \dots, v_n と f_1, \dots, f_m を W の 2 つの基底とすると $m = n$ である。

この事実は後で一般的な状況で証明する。

$$(5) \ W = \left\{ \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} \in \mathbf{R}^3 \mid x_1 + 4x_2 + x_3 = 0, 2x_1 + 3x_2 + x_3 = 0, x_1 - x_2 + x_3 = 0 \right\}$$

$$(6) \ W = \left\{ \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} \in \mathbf{R}^3 \mid x_1 + 4x_2 + x_3 = 0, 2x_1 + 3x_2 + 2x_3 = 0, x_1 - x_2 + x_3 = 0 \right\}$$